

新入生アンケートに見る1年生の声

1 年生が総合入試や全学教育に抱いている思いは如何に。今回は「新入生アンケート2016」※の中で寄せられた「本学の入試制度や教育に関する意見」から一部をご紹介します。

※4月11日～5月12日実施

◆前期入試でも学部別入試を実施して欲しい

最も多くの回答に見られたのがこの意見でした。現行の募集要項では前期日程試験で学部別入試を行っている理系学部は医・歯・獣医・水産学部に限られるため、例えば農学部[※]に志望を決めている学生であっても前期日程試験で合格を決めるためには総合理系を選ばざるを得ません。“前期(日程試験)でも学部別入試が欲しかった”などの意見がありました。興味深いことに、このことに言及したのは総合理系学生に限りませんでした。文系学生からも“農学部入りたい子がホントかわいそうだから前期(日程試験)でも農学部受けられるように”との意見がありました。

◆抽選科目の定員を増やして欲しい

フレッシュマンセミナーや外国語演習はWeb履修登録システムにおける抽選を経て履修者が決定します。抽選への応募は複数の科目に応募することができますが、高倍率になる授業も多く、全て外れてしまうことも起こりえます。“初習外国語は入門を履修するようになっておきながらどうしてこんなに枠が少ないんでしょうか”など、初習外国語の入門クラスの数を増やして欲しいとの要望が目立ちました。

◆科目選択をもっと自由にして欲しい

履修登録できる単位数に上限が設定されているため、必修科

目や移行点に関わる科目を埋めると自由に選択できる単位が少ないと感じている学生が少なくないようです。単位数の制限に加え、必修・選択必修科目と興味のある講義の開講時間が重なっていたことを残念がる記述も見られました。

◆総合入試は良い制度

“自分の進路がはっきりしないような人も沢山いると思うので、そのような人を考慮する総合入試は素晴らしい制度”など、総合入試に肯定的な記述も複数見られました。総合入試という仕組みは良いのだが改善できる点もあるというのが、全体を通しての印象でした。

(浅賀圭祐)

2016年度前期

スタディ・スキル セミナー盛況

LSOでは毎学期の始めに、レポートの書き方など学習スキル



に関するセミナーを開催しています(附属図書館との共催)。新入生にレポートの体裁や実験レポートのまとめ方を伝える本セミナーの参加者は着実に伸びてきており、今学期開催分の延べ参加人数は前年比1.5倍の424人を記録する大盛況となりました。昨年にオープンした北図書館西棟の恵まれた設備にも後押しされました。

スタッフの心象 第10回「不幸な履修」

このコーナーではLSOに寄せられる進路・修学・学習相談の内容を元に、相談現場の様子をお伝えします。

2016年4月、新入生の履修相談のこと。

学生「主題別科目の講義Aと講義Bのどちらを履修するか迷っています。どちらかというとならばAの方が興味あるんですが、教職の関係でBも取りたいんです。」

スタッフ「Bは後期にも開講されるから、今学期はAを取ると良いと思いますよ。」

一件落着かと思いきや、次の発言に驚かされました。

「そうなんですが、Bの過去の成績分布を見ると前期の方が良い成績が取り易そうなんです…。」

履修する講義は卒業要件と移行点算出基準単位を考慮した上で、自分の興味に従って決めるものです。しかし、興味他にWeb上に公開されている成績分布を見ながら履修計画を立てる学生がいるようなのです。

移行点による順位付けがあるので少しでも良い成績を取りたいのは当然です。希望する学部・学科へ移行するために学生は

一生懸命勉強します。そのような中で講義によって成績分布に差があらくなれば、良い成績を付けて貰えそうな方にどうしても目が行ってしまいます。そんな状況は学生にとって不幸と言わざるを得ません。

本学では成績分布に著しい偏りが出ないように努めており、成績分布にそこまで大きなばらつきがある訳ではありません。それでも学生からすると差があるように見えてしまうのでしょうか。

数多くの教養科目の中から履修する講義を選ぶという作業は、広く自分の興味を探ることであります。高校の時に興味を絞れなかったという理由で総合入試を選んだ学生にとってはそれなりにエネルギーを要することでしょう。成績分布の差はそこに安易な選択基準を与えかねません。成績分布を揃えることは、不公平感を無くすと共に、学生が自らの学問的興味に向き合うことにも繋がるのではないのでしょうか。

(浅賀圭祐)



「君はどんな本を読んでいますか」

理事・副学長/高等教育推進機構長 新田孝彦



(当時の学生証の写真より)

私が山形の一地方都市から北大に入学したのは1970年(昭和45年), いまから46年も前のこととなります。当時の北大は、医学部など一部の学部を除いては、文系・理系という区分だけの大きく入り試で、試験も5教科7科目というフルセットでしたから、文系でも理系は2科目を選択しなければなりません。このようなきつい入試は、北大以外では東大だけだったと記憶しています。それでも、なぜ北大か。「現役で入れるところで(経済的理由と受験勉強に対する嫌気ですね)、実家からなるべく遠いところ(一人暮らしにあこがれていましたから)」というのが自分で決めた条件でした。それなら九大でもよかったです。やはり、「北へのロマン」がありました(とは言え、一年目の夏休みには全車中泊の九州一周鉄道旅行をしたのですが)。

大学では「哲学」を学ぶと決めていたので、入学してすぐに、お祝いでもらったお金をはたいて「世界の名著」シリーズの既刊分全巻とタイプライターを購入しました。タイプライターは外国語学習用です。コピーなどはありませんでしたか

ら、特に初習外国語のドイツ語は、テキストをタイプライターで打ち直し、これに文法事項などを書き込んで勉強しました。「読解」のみに片寄った古い勉強法ですが、このとき覚えたブラインドタッチはパソコン時代のいまになって役立っています。「哲学」の中でも「倫理学」を専攻したのは、教養時代に手に取った和辻哲郎の『倫理学』の影響が大きかったように思います。大学紛争の余波で入学式はなく、授業もしばしば休講になったので、本を読む時間はたっぷりありました。

何を讀もうか。哲学書は、購入した「世界の名著」を手当たり次第に読むところから始めましたが、それ以外には、中学・高校を通じて文学作品を読むことがほとんどなく、教科書に出てくる作家以外にはどんな人がいるかも知らなかったのも、生協で文庫の目録を入手し、人名索引の五十音順に、アは安部公房、イならば伊藤整というように、一人ずつ選んで読み始めたというのも懐かしい記憶です。これを何巡か繰り返しているうちに、好きな作家の目星がつかますから、次はその作家の他の作品に当たる、というやり方です。

いまから思えば(図書館長の職にある身としてはなおさら)、なぜ図書館を利用しなかったのか不思議ですが、下宿の小さな部屋(元は8畳の部屋を二つに仕切り、半畳分は押し入れなので、実質は3畳半)の本棚に読書の跡が積み重なって行くというのが単純にうれしかったのかもしれませんが。まったくの自己流ですが、何も知らない分野で読書の幅を広げ、自分自身の関心の在処を探るためにはそれほど悪くない読書術だったかと思えます。

自分の姿を知るためには、自分よりも大きな鏡におのれを映し出さなければなりません。自分の精神を映し出すための鏡は、人類の知的遺産である古典であり、名作です。美食家で知られるサヴァランは、「どんなものを食べているかを言ってみよう」と語ったそうですが、さて、君はどんな本を読んでいますか。

メンバー紹介

スラブ・ユーラシア研究センターにてアゼルバイジャンの研究をされてきた立花優さんを新メンバーに迎え、学修支援のさらなる充実を目指して参ります。どうぞよろしくお願致します。

LSOメンバー			スタッフ(特定専門職員)		
室長			多田 泰紘	理学院修了	進化生物学
細川 敏幸	高等教育推進機構 教授	高等教育	清水 将英	理学院修了	数理物理学
アカデミック・アドバイザー			浅賀 圭祐	理学院修了	素粒子物理学
大塚 吉則	教育学研究院 教授	温泉気候医学	立花 優*	文学研究科修了	比較政治学
森 治嗣	工学研究科 教授	原子力システム	事務補助員	石手洗 千春	
八若 保孝	歯学研究科 教授	小児・障害者歯科学			

*2016年4月より着任

編集後記

本誌コラムの「あの頃みんな一年生」も第5回となりました。今回は副学長の新田孝彦先生よりご寄稿いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。そして、学生時代のお写真まで頂戴しました。私は眼差しが今の先生と同じと感じました。皆様はどうでしょうか。

ちなみに、私が最近読んだ本はリクガメの図鑑と飼育書です。…どんな人間かまるわかりですね。

(多田泰紘)



ラーニングサポート室

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目 電話:011-706-7526 E-mail:lso@high.hokudai.ac.jp
北海道大学高等教育推進機構2階 URL:http://asc.high.hokudai.ac.jp/

次号は9月発行予定です